

泌 尿 器 科 紀 要

第 4 巻 第 8 号

昭和 33 年 8 月

随 想

或る日のマイの教室

茲恵医科大学教授 南 武

6時に室内電話で起して貰った。昨夜ベット作りに来たボーイが置いて行つたイチゴのフルーツボンボンを一口にほうり込む。7時ちよつと過ぎに Urologisches Krankenhaus der Stadt München にゆく。手術室に入つてみたら、既に Oberarzt が第1例の患者に Pyelolithotomie をやるべく皮切を入れたところだつた。7時40分には Prof. May も入つてきて、間もなく次の手術を始めた。第2、第3例とも Pyelolithotomie であつた。第2例の方は、周囲の炎症性癒着がひどく、腎外腎盂を剝離しているうちに腎盂が破れて結石が飛出してゐた。ネフロストミー・チューブを入れてから、尙少し剝がしているうちに尿管が腎盂との接合部で離断してしまつた。尿管には細い木綿のテープを下から通して持ち上げていたのである。こんな例は極めて稀らしい例だがいい参考になつた。併し、やはり、インジューで摘出することを第一義とすべきであろう。いつでも “Hangematte” nach Pflaumer を使うことは考えものである。第3例は結石も大きく腎盂にV字形の切開を入れてとり出し、ネフロストミー・チューブを入れて術を終つた。次は Hydronephrose の成形術、次いで右側尿管下端の結核による狭窄で、Boari の手術をしたが、これは美事なものであつた。新たに膀胱壁に小孔をもうけてカテーテルを入れ臨時的膀胱瘻も作つていた。尿管から腎盂の方に入れた留置カテーテルはビニール製であつた。今日の手術は合計11で他に尙、Boari の手術、副血管の圧迫による水腎症、膀胱結石等が残っているが、助手達がやる筈である。教授の手術が終つたので共に教授室にゆき色々話した。午後見た手術の一つは異常血管によるものではなく尿管内の小嚢腫であつた。此処で思つたことは余り吸引器を活用していないことである。手術創の繃帯は殆ど常に広い一枚のガーゼをマスチゾールで皮膚に貼布して止めていた。他処では絆創膏をふんだんに使つていたのに。午後3時すぎなのにまだ手術は続いている。併し疲れたので途中で昼食をとつて歸つてきた。この病床は70余で、他にイザール河の近くで、ISMANINGER STRASSE にある KRANKENHAUS RECHTS DER ISAR にはベット100あつて、そこも大学の附属の様になつてゐる。こちらの医局は Oberarzt を含めて5人であり、勉強にはなるが、とても忙しいことも想像以上である。手術室も大きい一つしかない、いまだに戦災後の仮住居の形であるらしい。併し隣りの準備室で次から次に麻酔をし、全部消毒掛布も掛けて待つてゐるので、暇をつぶすことはない。街にはやはり、今だに戦災家屋が残つていて、その一部の使える所は皆改裝修繕して使つてゐるし、すべてがまだまだ耐乏生活である。国富が一定以上になる迄は総ての人が耐乏しよう

としているらしい。その反面、一方に於ては近代工業が栄え、超近代的な庶民のアパートなども、どんどん建ちつつある。手術日にはいつも7時から始めているのであるから、助手連の登院時間はもつと早いわけである。彼等の勤勉さには全く頭が下るし、省みて自ら恥しくなつた。彼等は同時に又非常に親切であり、ユーモラスでもある。併し、親切の押し売りは全くしない。之も学ぶべきところである。

又、或る日は(7月24日)、一旦宿に帰り再び、午後6時頃約束通り、Arbeitsamt の教室にマイを訪れた。すでに仕度をして待つていて呉れた。すぐ彼の車で此処から7軒ばかり離れた Isar 河畔の彼の家に向つた。途中、窓から見える沿道の街や建物などを説明してくれたり、終戦後ドイツの女も口紅を濃くしたり、爪を赤く染めたりしていることなどを、なげき乍ら話していた。邸は、大きい家だけがまばらにある、樹木の多い静かな郊外の、むしろさびしい様な一劃にあつた。2階建て、外装の塗料の白さが如何にも新築の家らしく又清楚に見えた。2カ月前に出来上つて引越したばかりだと言う。やさしげな併し話すと元気のよい妻君も出迎えてくれた。応接間には彼の好みの古い絵や木彫のマドンナの像などもあつた。台からはずして彼自ら説明してくれたが、17世紀頃のものだそうで仲々いい顔をしていた。日本式に腰の低い大きな窓ガラスの前には、植えたての広い芝生が展げていた。その中に何の樹か大きい老樹が5-6本残されていた。つい1-2年前までは林だつたところだそうだ。夕飯前にその辺を少し散歩しようと、先に立つて案内してくれた。庭に下りて、塀の右手の木戸を排して出たところが、低い土堤の上の茂みを距ててイザール河に沿っている小道であつた。中年男の独りで散歩しているのに出遭つただけである。昨日の雨の名残りか、少し濁つて水嵩もふえていて流れはかなり早かつた。向岸の林の上には雲が出ていて、低くなりつつある赤い太陽を映していた。この河沿の路を暫らく歩いて帰つてきた。間もなく同じく招待されていた美術学校の校長夫妻や洋画家である妻君とその夫である博物館で絵の歴史を研究している人達がやつてきた。皆が揃つたところで、夫妻が先導してこの新築の家の中を全部案内してみせて呉れた。彼れの書斎は二階で庭に面した真正面の大きい部屋で、これも大きいガラス窓の外にはテラスもあつた。晴れた日には雪の山も見えろとのことであつた。芝生の緑に対して左手の隅の花壇の赤いベコニアの花が美しく見おろされた。書斎の隅には読書に疲れたひとときを寐るのもあろう、安楽椅子のベツトもおいてあつた。裏手の納戸の中には彼だけの上衣、ズボン、ワイシャツ、肌着、ハンカチ、靴などが、沢山の棚に恰も男もの専門の洋品店のその様に整然と置かれてあつた。数の多いことは驚くほどである。女中も2人おり、その家族を住まわしてあるという家も裏手のガレージに続いて建てられてあつた。自分が思う様に建てた新築の家に入るのは誰れしも嬉しいに違いない。寝室から浴室、台所まで見せられてから食堂に案内された。青い小梅をかじり乍ら、アペリティーフのマンハツタンを吞んで、食卓についた。マヨネーズを掛けた魚や Schweiner Schnitzeln などドイツのものとしてはとてもうまかつたし、Brötchen も殊のほかよく焼けていた。ラインワインも上等のものらしくつた。終つて応接間でコーヒーをのみ乍ら又色々話ははずんだ。奥さんも妹さんも英語が達者である。日本趣味もあるらしく窓の一つを日本障子に直したいとも言つていた。日本の絵の話も出た。10時頃腰をあげようとしたら、皆でまだ早すぎるといつて引とめられた。明朝、また早いのにと思ひ乍らも遂に11時になつてしまつた。最後にまた、シャンパンを馳走になり、車でホテル迄送つて貰つた。彼と限らず、よく働き、よく遊ぶ生活をしているらしい。